

## 六波羅蜜 —慈悲と智慧の菩薩行—

### 六波羅蜜とは何か

六波羅蜜とは六度とも言われ、大乗の菩薩が修行すべき、「布施（檀那）・持戒（尸羅）・忍辱（羼提）・精進（毘梨耶）・禪定（禪那）・智慧（般若）」の六種の徳目のことです。

波羅蜜は梵語のパーラミーターの音訳であり、「完全」「完成」などという意味があります。

また波羅蜜とは「彼岸に到る」と訳し、迷いの此岸を脱して悟りの彼岸に到達するための修行を言います。漢訳の六度とは、六つの船に乗って悟りの岸に渡（度）るための修行法という意味になります。

### 六波羅蜜の特長

釈尊は衆生の機根に応じて声聞に四諦、縁覺に十二因縁、菩薩に六度を説きました。四諦と十二因縁は、小乗の悟りを得るための二乗（声聞・縁覺）の修行でしたが、この六波羅蜜（六度）は大乗の悟りを目的とした菩薩の修行を指します。

そのため、小乗の修行が自己の救済のみを求めたのに対して、六波羅蜜では特に「布施と忍辱」の二つの修行を説いて、他者をも救済するという大乗の利他（慈悲）の精神を重視します。

また権大乗の般若経では六波羅蜜のうち、特に智慧（般若）波羅蜜が他の五波羅蜜を支え、先導する役目を果たすと説かれています。

このように、六波羅蜜では利他の精神と般若の立場とが堅持され、その点に大乗の菩薩行としての特長が認められます。

### 六波羅蜜の説明

#### 〈布施波羅蜜〉

小乗の菩薩も六波羅蜜を修行しましたが、ここでは主に大乗の菩薩の修行の上から説明します。

布施とは、他に施し与えることですが、これには「財施・法施・無畏施・身施」等が説かれます。

財施とは他に金銭財物などを与えることであり、法施とは教えを説き与えることです。無畏施とは相手の畏れを取り除いてやり、安心を与えることです。また身施とは自分の身を投げ出して他に奉仕することです。

大乗の菩薩は他者を救済するためにこれらの布施を行います。釈尊は「施す」という執着心をもって布施をしてはならないと教えています。

菩薩は「施す者・施される者・施し物」の三者に対する執着心がなく、その三者も本

来的に空であると見ます。これを「三輪清浄（空寂）の布施」と言います。執われない空の智慧をもって、菩薩は布施という利他行を完成するわけです。

### 〈持戒波羅蜜〉

持戒とは文字通り戒を持つことですが、また戒を守ろうとする自発的な決定心をも指しています。

戒の種類には、在家修行者に五戒・八斎戒があり、比丘に二百五十戒、比丘尼に三百五十戒等があります。

これらの戒は主に小乗戒において用いられますが、持戒波羅蜜には大乘の利他の精神に基づいた菩薩戒が説かれます。この菩薩戒には、「防非止悪」（悪事を防ぎ止めること）の意味も含めて「止悪・修善・利他」の三種の用きがあります。これを三聚浄戒（三種の浄らかな戒）と言います。

この三聚浄戒の特色は、上に向かってはどこまでも菩提（悟り）を求め、下には無数の衆生を救済するという自発的な自利利他の精神にあります。

### 〈忍辱波羅蜜〉

忍辱とは、あらゆる侮辱や迫害に耐え忍び、慈悲の心を起こすことです。

忍辱には生忍と法忍の二種があります。生忍とは尊敬を受けても自慢せず、迫害されても怒りや怨みを起こさないことです。法忍とは寒暑や飢え、病等にあっても動揺せず、精神的な邪見や憍慢などにあっても動じないことです。

この忍辱波羅蜜は、自我法我への執着を離れ、一切が空であるという般若の智慧によって得られると説いています。

### 〈精進波羅蜜〉

精進という言葉は日常語でも使われますが、精進とは弛まず仏道を修行することです。

これには身精進と心精進とがあります。この二種の精進には他の五波羅蜜の修行に、身心共に打ち込んで、弛まずに励むとの意味もあります。

つまり身精進は布施・持戒を修すること、心精進は忍辱・禅定・智慧の修行に専念することです。

ここでも智慧のない精進は、盲目の精進であり、真の精進波羅蜜にはなり得ないのです。

### 〈禅定波羅蜜〉

禅定とは、心静かに精神を統一し、真理を見極める修行を言います。またその修行によって心身共に動揺することがなくなり、安定した状態にあることを禅定と言います。

本来、仏法者が必修すべき修行徳目を「戒定慧の三学」と言いますが、第二の定学はこの禅定のことです。

釈尊は、快樂と苦行の二辺を離れ、正しい禅定を深めて悟りに至ったのですから、本来、智慧と禅定は不可分であると言えます。

智慧を離れた禅定は野孤禅（邪禅）であると仏法では戒めています。

## 〈智慧波羅蜜〉

般若経では、般若波羅蜜の重要性を明かし、一切皆空いっさいがいこくうという事物の平等の本質を悟り、その般若の智慧を完成する意義を説いています。

大乘の菩薩はその般若の空の智慧を得ています。その智慧は、あらゆる分別や差別を離れて一切は平等（空）であると洞察する、平等智のことです。

しかし、大乘の菩薩はその平等智だけに安住することはありません。つまり空の智慧を通して、いったん現実もうしゅうの妄執けを払いますが、再び利他のために現実世界に目を向けて、真の差別智（仮）を得るのです。

こうして平等智と差別智とが適切に得られて、初めて現実世界での六波羅蜜の実践が成り立つのです。

## 法華経と六波羅蜜

このように、大乘の菩薩は慈悲と智慧に裏打ちされた六波羅蜜を修行して大乘の悟りを得ることができます。

この六波羅蜜について般若経には平等智くうち（空智）が六波羅蜜の重要な役割を果たすと説かれています。その智慧は法華経の円融円満えんゆうえんまんの仏智ちゅうどうち（中道智）に比較すれば偏頗へんぱなもので劣るのです。

それ故、法華経には、権大乘の六波羅蜜は成仏のための完全な教えではなく、法華経こそが真実の教えであり、これを根本とする菩薩行が真の成仏道であると示されています。

無量義経には、

「未だ六波羅蜜を修行することを得ずといえど 雖も、六波羅蜜自然じねん ざいぜんに在ざいぜん前ぜんす」（法華経 四三〇）

と六波羅蜜の修行とその功德は、法華経に具そなわると説かれています。

また大聖人様は『観心本尊抄』に、

「釈尊いんぎょう かとくの因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す。我等此の五字を受持すれば自然じねんに彼の因果の功德を譲り与へたまふ」（御書 六五三〇）

と仰せになっています。

末法の私たちは、文底下種の大御本尊を受持することによって、六波羅蜜の修行の功德も、さらに成仏の果報も自然に得ることができるのです。